

インド現地調査報告

井上貴子(大東文化大学)

1. 調査目的

2009年3月7日出発26日帰国の日程で、インドで現地調査をおこなった。8日から18日までは、南インド、タミルナードゥ州の州都チェンナイ(旧マドラス)に滞在し、19日にカルナータカ州の州都ベンガルール(旧バンガロール)に移動し、帰国日まで滞在した。

今回の調査の目的は、報告者が今回のプロジェクトの中で追及したいと考えているテーマである文化と産業の関係である。本の形となって書店に並ぶ文学作品、映画館で上映される映像作品、音楽会で演奏される音楽、美術館で展示される美術工芸品といった、すでに社会的に流通している表象文化そのものをテキストとして読み解いたり、テキストの構築のされ方を作者と社会との関係性の側面から追求したり、こうしたテキストの受容については、個々にかかなりの研究蓄積があると考えられる。しかし、特定の文化を商品化して社会的に流通させる役割を果たす娯楽産業やメディアや、私的・公的な文化振興機関も透明な存在ではあり得ない。むしろ、彼らは、作り手と受け手の間で両者に働きかけながら、素材を取捨選択し、表現方法に介入し、いかに流通させるかを決定する重要なアクターである。文化をイデオロギー的な側面から、あるいはアイデンティティ構築の側面から検討するには、その存在は決して見逃せない。さらに、グローバル化が進行し、IT産業の発展によって比較的安価に情報にアクセスできるようになった今、その比重は増してきているとさえいえる。そこで報告者は、文化テキストとその受け手とを架橋する産業という三者の関係を自身の研究の蓄積がある南インド古典音楽の場合について調査したいと考えた。すでに、政府の文化政策とチェンナイにある民間の文化振興機関についての研究はかなり行っているため、今回は音楽産業、特にレコード会社を主たる調査対象とし、加えて、ベンガールの文化振興機関についても、チェンナイとの比較の観点から調査することにした。

2. チェンナイにおける音楽芸能振興

南インド古典音楽(カルナータカ音楽)は、いわゆる伝統文化である。一般に伝統文化というものは、グローバルなポピュラー・カルチャーの流通に押されて、保護育成への公的援助や圧力がなければ存続が難しい場合が多い。しかし、こと南インド古典音楽舞踊に関して言えば、音楽家の数、コンサートの数や規模の側面から言っても、年々増加の一途をたどり、若手の優秀な人材が数多く育っている。その中心的な役割を果たしてきたのは、主にサバーと総称される私的な芸術振興機関であり、それを財政的に支えているのは民間企業の経営者たちである。さらに今日では、欧米でIT産業に従事していた比較的若い技術者が、インドに帰国して伝統芸能振興の一端を担うという例も少なくない。たとえば、南インド古典音楽舞踊のみに限定してCDやDVDなどを制作販売している主要な会社は、チェ

ンナイだけで4社あるが、そのうちの2社は90年代末に若いIT技術者によって設立された。今回は、これら新興のレコード会社社長、古典音楽舞踊専門誌編集者、若手・中堅世代の音楽家へのインタビューと、新聞・雑誌・録音録画等の資料収集を中心に調査をおこなった。

チェンナイでは12月から1月までの2ヶ月間は音楽シーズンで、一日中、古典音楽舞踊のコンサートが行われているが、この間に行われるコンサート数は、ここ20年間で約1000から2000以上へと倍増した。在外南インド系コミュニティの存在する世界各地の都市では、このシーズン以外の期間を利用した音楽祭の開催、インドとの間のデジタル通信による音楽教育なども盛んになっている。すなわち、IT技術の進展とグローバル化は、伝統芸能振興に大いに貢献しているのである。在外経験のある若い世代の音楽家の参入により、西洋音楽とのフュージョンをはじめとした新しい試みも盛んになっている。また、マドラス音楽アカデミーでは、サウンドアーカイブのデジタル化に取り組んでいるが、これも若いIT技術者の協力があって、実現に向けて動き出したものである。

では、なぜ、若い世代が伝統芸能振興に熱狂するのだろうか。それを読み解くには、在外南インド系コミュニティのアイデンティティ形成との関わりや、チェンナイのローカルな社会状況、特に複雑に交錯するカースト・アイデンティティとカースト間抗争、インドの歴史的な芸術振興の在り方にも注目する必要がある。今回の調査は現状認識を第一の目的としたため、少ない数のインタビューの中から、それを明らかにするところまではたどり着いていない。しかし、一点だけ指摘しておけば、この熱狂を全インド的なヒンドゥットヴァ(ヒンドゥー・ナショナリズム)と単純に結びつけることはできないということである。ヒンドゥットヴァは宗教的アジェンダではなく、完全に政治的レベルの問題であり、昔からあるローカルなヒンドゥー寺院はヒンドゥットヴァとは直接の関わりはない。さらに、19世紀から20世紀にかけて盛んになったヒンドゥー宗教社会改革運動の復古主義的な側面や原典回帰とは異なり、ヒンドゥットヴァのイデオロギーが古典文献に由来するわけでもない。この点をふまえて、さらなる調査を続けたい。

3. ベンガルールにおける音楽振興

もう一つの訪問地ベンガルールは、「インドのシリコンバレー」とも呼ばれるIT産業の中心地である。大都市の中では伝統的慣習を比較的良好に維持していると思われるチェンナイとは対照的に、ここでは、新しい都市中間層の文化的特徴として欧米的な価値観の流入と受容が顕著であると予想していた。確かに、表面的にはそのように見える部分も多い。しかし、ベンガルール最大の音楽ホール「チョウダイヤ記念ホール」を拠点とする音楽アカデミーの会長によれば、南インド古典音楽舞踊に対する熱狂は、チェンナイほどではないとしてもここでも見られるという。ベンガルールにも60を超える私的な芸術振興機関があり、毎年、チェンナイのシーズンに先立つ10~11月あるいはシーズン終了後の4~5月を中心に、これらの機関が各1~2週間の音楽祭を開催する。3月は基本的にシーズンオフ

なのだが、たとえば、報告者の滞在期間中に開催された事例としては、2度の来日経験もある著名な南インド古典舞踊バラタナーティヤム舞踊家マーラヴィッカ・サルツカイのオリジナル新作が上演され、約1000人収容のホールが満員となり、終了後にはスタンディング・オベーションが巻き起こった。観客は世代的にも非常に幅広く、決して年齢層が高いとはいえない。

4. ベンガルールの文化社会研究センターとの研究協力について

ベンガルールの文化社会研究センターThe Centre for the Study of Culture and Society (CSCS)は、1996年に設立された比較的新しい研究所である。独自の研究プロジェクトの推進と同時に、カルナータカ州に本拠地をおきインド各地及び海外にもキャンパスをもつマニパル大学、及び同じくカルナータカ州のクヴェンプ大学の共同利用機関として博士課程を中心に学生の指導も行い、海外の研究者の受け入れにも積極的である。CSCSは、従来型の人文科学の枠組みに捉われず、社会・政治・経済などの多様な側面から文化研究を推進することに重点をおき、比較的小規模な組織ながら、これまで顕著な業績をあげてきた。さらに、アーカイブのデータベースのデジタル化、古い現地語映画のポスターや映画評をはじめ所蔵資料のデジタル化にも取り組んでおり、インド国内で最も先進的な活動を行う機関の一つだといえる。ちなみに、1998年から4年間にわたって実施された特定領域「南アジア世界の構造変動とネットワーク」をはじめ南アジア関連の研究事業では、CSCSの専任研究員や共同研究員が招聘されており、すでに日本の南アジア研究者との交流の実績もある。

CSCSの研究プログラムの一つに、Culture: Industries and Diversity in Asia (CIDASIA)がある。このプログラムの一環として2007年9月にCulture Industries, Cultural Diversity and Cultural Policy in the Time of Globalizationと題する研究集会が、同じくベンガルールのAlternative Law Forumとの共催で行われた。この会議の記録は昨年発行されたのだが、まさしく、報告者が目指していたところと研究の方向性が一致している。こうした研究を南インド古典音楽・舞踊という伝統芸能を事例として行うことが今回の課題でもある。また、2007年の会議ではインド国内のみを研究対象としていたが、CIDASIAのプログラム全体のなかで、すでにインドの香港映画や韓流ブームなどが取り上げられ、中国や韓国の留学生の受け入れも行っている。さらに、アジア映画の比較研究プロジェクトの推進や、非公式の国際学術研究団体Inter-Asia Cultural Studiesをリードする機関として活動するなど、国際的な比較研究に積極的に取り組んでいる。

今回の訪問で「ユーラシア地域大国の比較研究」について、プロジェクトの全体像、文化をテーマとする第6班の概要、私個人の関心とこのプロジェクトとの関係について説明して協力を求めたところ、CIDASIAプログラムの担当研究員たちは、2007年の会議のテーマ自体、将来的に国際比較研究へと発展させるべき課題と考えていたものであり、ぜひ、CIDASIAプログラムに組み入れて共同研究を推進したいとの意向を示してくれた。具体的

な共同研究の進め方については、今後の検討課題であるが、個人または数名規模の比較的小規模な研究交流の積み重ねに加えて、将来的には国際会議の開催(日本・インド)、論文集の出版(英語版の出版は特に重要だろう)にまでつなげていけたならば、非常に有益なものになると考えている。また、「グローバル化時代における文化と産業」というテーマは、単に第6班のみにとどまらず、経済・政治・社会などを含めた幅広い文脈から検討すべき学際的な課題であり、他班の協力が得られれば、よりよい成果が期待できるのではないかと思う。

余談ではあるが、CSCSで「ユーラシア」という概念、ロシアとの交流の現状についてたずねてみた。これまでインドでは「ユーラシア」という概念はほとんど用いられたことがない。「ユーラシア」という言葉のイメージから、彼らがまず想像するのはロシアとヨーロッパとの関係である。インドと中国の間には古代から現代に至るまで長い文化・学術交流の歴史があり、今日においても国境を接する隣国として中印関係は重要視されている。一方、インドとロシアとの関係は、独立後からソ連崩壊まで、インドの親ソ的な外交政策のおかげで文化・学術交流は非常に盛んであったが、ソ連崩壊後の外交政策の転換により、交流がぱったり途絶えてしまったという。このような変化について考えることも興味深い課題であると感じた。